

新病院長に聴く

独立行政法人地域医療機能推進機構

下関医療センター院長

第 10 回

山下智省先生

と き 平成 30 年 12 月 20 日 (木)

ところ 下関医療センター

[聴き手：広報委員 石田 健]



石田委員 平成 26 年度から始めました本会報の「新病院長に聴く」の第 10 回目として、平成 30 年 4 月に下関医療センターの院長に就任された山下智省先生にインタビューさせていただきま。まずは自己紹介からお願いします。

山下先生 「やました さとよし」と読みます。初対面で正確に名前を読める方がまずいないので、あえて言います。出身大学は山口大学、昭和 60 年卒です。卒業後、山口大学医学部第一内科（現在の消化器病態内科学）に入局しました。大学では主に肝臓疾患の診療と研究に携わりました。平成 10 年から現在の病院に移り、平成 30 年 4 月に院長を拝命しました。

石田委員 続きまして下関医療センターの紹介をお願いします。

山下先生 前身の下関厚生病院は、平成 26 年に独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）に移ったことを契機に、病院名を現在のものに変更しました。JCHO はその名称にあるように、地域医療の推進を目的とした組織です。JCHO グループの病院は全国に 57 施設あり、それぞれ規模や機能が異なります。下関医療センターは、主に高

度急性期／急性期診療を担う 285 床の中規模病院です。医師数は約 40 名で、ほとんどが山口大学から派遣された医師で構成されています。

石田委員 高度急性期／急性期診療を担う病院としては少人数でよく頑張っておられますね。

下関医療センターにはどのような特徴がありますか。

山下先生 伝統的に脳神経疾患領域の診療に強みがあり、下関市民から厚い信頼を得ており、現在もそれは引き継がれています。脳血管疾患や脳腫瘍の診断・治療は、大学や周辺施設に負けないレベルを保っていると自負しています。

その他、内科系・外科系とも主な診療科がそろっており、急性期疾患の診療を幅広く提供できる体制を整えています。しかし、1 年ほど前から整形外科常勤医が不在となっており、周辺の病院のサポートを得なければならない状況となっている点が残念です。

附属施設として、健康管理センター・老人保健施設・訪問看護ステーション・居宅支援センターを有し、健診、介護、在宅医療を通じて、幅広くシームレスな医療・介護を提供できる機能を持っていることも強みです。

石田委員 これからの地域医療構想の推進には絶対に必要な附属施設ですね。

話は変わりますが最近、世間を賑わせる事件がありました。事件も落ち着いたと聞きましたので今回、インタビューをお願いしました。現在はどうのような状況でしょうか。

山下先生 平成 30 年 8 月に起こった輸液バッグ破損事故ですね。入院患者さんに使用する予定の輸液バッグに穴があき、輸液が漏れ出ていることが発見された事件です。針状のもので開けられたような穴であったこと、破損した輸液が 2 つあったことなどから、単なるアクシデントではなく、故意の犯行である可能性があったため、警察に通報し、記者会見を開く事態となってしまいました。患者さんの健康被害に至らなかったことは不幸中の幸いでした。

市民の皆さんや周辺医療関係者に不審と不安を抱かせてしまったこと、職員に動揺を与えてしまったことは大変申し訳なく思っています。事件は未解決ですが、病院としては捜査への全面的な協力と再発防止に全力を挙げて取り組んでまいります。

石田委員 突然のことで大変でしたね。この事件を経験してどのように思われましたか。

山下先生 院長就任早々、まったく大変なことに遭遇しましたが、それに対応する過程で、病院内のいろいろな問題が浮き彫りになりました。セキュリティ、スタッフ間の情報共有、ルールやマニュアルの遵守など、いかに不徹底のまま日頃の仕事をしていたことか。また、警察やマスコミへの対応は貴重な経験でした。前向きにとらえて、組織の立て直しや強化に役立てることが大切です。誤解の無いように願いますが、院長就任後の早い時期にこのような事件を体験できたことを前向きに捉えたいと考えています。

石田委員 これからもこの経験を生かし、さらに院長としての幅を広げてご活躍ください。

下関では地域医療構想の議論が活発であると聞

いています。現時点での可能な範囲でお話いただけますか。

山下先生 高齢化ということでは全国トップクラスの山口県ですが、同時に医師の高齢化も大変大きな問題です。これに加えて、下関は特有の課題をかかえています。それは、同規模の急性期病院が複数並立しているという点です。当院の他に、関門医療センター、下関市立市民病院、済生会下関総合病院という 4 病院が協力・連携して救急や急性期疾患医療を担っています。この体制はこれまでうまく機能してきましたが、次第にその非効率さが指摘されるようになりました。これは将来、山口県や下関市や山口大学にとって大きなお荷物となる可能性もあります。限られた医療資源の効率的な活用や若手医師の確保のために、病院の数を減らして、より大規模の病院に再編すべきではないかという議論が進められています。賛否両論で議論は容易には進みませんが、その方向性は誤っていないと私は考えています。自院の経営だけでなく、地域医療構想を推進していくことも、院長としての私の使命と自覚しています。

石田委員 すばらしいお考えですね。時間がかかるとは思いますが、下関の地域医療のために頑張ってください。

ところで NPO 法人を運営しておられるようですが、その内容をお聞きしてよろしいでしょうか。

山下先生 山口栄養サポートネットワークのことですね。平成 24 年に設立し、私が理事長を務めています。当院は山口県で初めて全施設型栄養サポートチームを稼働した病院です。臨床栄養の教育や啓発において、自院はもちろん県内外の病院や介護施設に指導的役割を果たしてきました。この栄養サポートチームの発想とノウハウを、県内の他施設と連携し広めていくために NPO 法人に発展させました。国民の適切な栄養管理は今後ますます重要になってきます。山口栄養サポートネットワークを通じた活動は、私の仕事において、もう一つの大切な柱と考えています。

石田委員 初めて詳しくその内容や意義をお聞きしました。しかし、これから徐々に重要性が一般に認知されると思います。

では、これからは個人的なことを伺います。ご出身はどちらですか。

山下先生 出身は岡山県です。昭和 35 年しし座の生まれ、血液型は AB です。岡山県の最北、新見という田舎町で生まれ育ち、中国山地の山々に抱かれながら、のびのびと高校卒業まで過ごしました。大学に入ってから後は、ずっと山口県です。

石田委員 以前、私は新見市の有名な井倉洞を探検したことがあります。秋芳洞と比べ大変スリルを感じました。

ところで、座右の銘はありますか。

山下先生 特にありませんが、院長就任を言われたから肝に銘じたのは、ウインストン・チャーチルの“Never! Never! Never! Never give up!”です。

石田委員 何事でも諦めない気持ちを持つことは大切ですね。

尊敬する人物はおられますか。

山下先生 いろいろ挙げられますが、経営者としては稲森和夫氏ですね。彼の言動や著書にふれると、結局最後にものをいうのは哲学であることを教えられます。

石田委員 趣味についていかがでしょうか。

山下先生 いちばん困る質問です。これといった趣味はありません。休日は家の中でダラダラと過ごしている男です。好きなことは何？と聞いてもらった方が答えやすいかもしれません。確実に好きなことは本を読むことです。

石田委員 どんな本を読まれますか。

山下先生 なんでも読みますが、小説は比較的少

なく、歴史・政治・自然科学分野のノンフィクションを読むことが多いようです。もっとも、残された人生が長くないという年齢に達して、名作とたたえられる作品をあまりにも読んでこなかったことに焦りを感じるようになりました。日本人として生まれたからには、少なくとも日本文学史上に残る作品は死ぬまでに一冊でも多く読まないことには悔いが残ると考え、最近は意識してそのような作品を選ぶようにしています。漱石とか谷崎とか三島とか阿部公房とか。これからはさらに時代をさかのぼった古典に挑戦したいですね。

石田委員 他に好きなことはありますか。

山下先生 本をたくさん読むと、自分でも何か書けるのではないかという気になり、執筆の機会を見つけてはエッセイストのまねごとをしています。病院のホームページの「やじろべえ」というページに私の駄文が公開されているので、興味のある方はご一読を。

あとは旅行と音楽鑑賞ですね。大学在学中は軽音楽部に所属し、講義そっちのけでアルトサックスの練習にあけていました。たいしてものにはなりませんでしたが、おかげでジャズには詳しくなりました。今でも一番たくさん聴くジャンルはモダンジャズです。サックスは自宅ではこりをかぶっていますが。

石田委員 最後に、山口県の若手医師へのメッセージをお願いします。

山下先生 最近、東京在住の某公務員の方から聞いたエピソードを披露しましょう。

その方のご家族が急病になられ、救急車を要請することになったときの話です。救急隊から都内の病院に搬入を申し入れても、一向に受け入れてくれず、しばらくたらい回しの状態になってしまったのだそうです。そのことが彼の耳に入り、業を煮やし、とある病院に一報を入れ、「〇〇の関係者だが…」と告げると、たちまち患者受け入れを了承したとのこと。「東京の医療体制はひどい、医師の倫理観はどうなっているんだ。」と

その方は嘆いておられました。

地方から見ると、東京はなんとも華やかな、輝かしい街であることかと思いがちですが、実は生活の根幹の部分では、お粗末な状況にあることがうかがえる話ではないですか。

地方で医療を担うのは大変です。しかし医師としての責任感と倫理観をしっかりともって実直に仕事をするのが、地方の人々に豊かで安心できる生活を保障していることに、我々は自身と誇りをもってよいと思います。特に、若い医師諸君には地方で医師を務めることの意義とアドバンテージを理解してもらいたい。これをメッセージとしましょう。

石田委員 下関市には今後、解決しなければならない困難な課題があることがよくわかりました。これからが大変と思いますが、お体に気をつけて下関市民のために頑張ってください。本日は長時間にわたるインタビューを受けていただき、ありがとうございました。

「若き日（青春時代）の思い出」原稿募集

投稿規程

字数：1頁1,500字程度

- 1) タイトルをお付けください。
- 2) 他誌に未発表のものに限ります。
- 3) 同一会員の掲載は、原則、年3回以内とさせていただきます。
- 4) 編集方針によって誤字、脱字の訂正や句読点の挿入等を行う場合があります。また、送り仮名、数字等に手を加えさせていただくことがありますので、ある意図をもって書かれている場合は、その旨を添え書きください。
- 5) ペンネームでの投稿は不可とさせていただきます。
- 6) 送付方法は電子メール又はCD-R、USBメモリ等による郵送（プリントアウトした原稿も添えてください）をお願いします。
- 7) 原稿の採用につきましては、提出された月の翌月に開催する広報委員会で検討させていただきますが、内容によっては、掲載できない場合があります。

【原稿提出先】

山口県医師会事務局 広報・情報課

〒753-0814 山口市吉敷下東3-1-1 山口県総合保健会館5階

TEL：083-922-2510 FAX：083-922-2527

E-mail kaihou@yamaguchi.med.or.jp